

厚生労働科学研究費補助金（新興・再興感染症及び予防接種政策推進研究事業）
「国内外の薬剤耐性菌による集団発生対策及び適正使用等の対策・評価に資する研究」
分担研究報告書

国内外の薬剤耐性菌による集団発生対策及び適正使用等の対策・評価に資する研究
－ 多剤耐性緑膿菌の届出体制の評価、AMR事例のリスク評価と対応策の検討、
及びアジア太平洋のAMRアウトブレイク対策の改善 －

アジア太平洋地域のAMRアウトブレイク対応支援の検討

研究分担者	山岸 拓也	国立感染症研究所	薬剤耐性研究センター
研究協力者	黒須 一見	国立感染症研究所	薬剤耐性研究センター
	中下 愛実	国立感染症研究所	実地疫学研究センター
	大竹 正悟	国立感染症研究所	実地疫学専門家養成コース
	清水 唯	国立感染症研究所	実地疫学専門家養成コース
	塩本 高之	国立感染症研究所	実地疫学専門家養成コース
	福住 宗久	国立感染症研究所	実地疫学研究センター
	島田 智恵	国立感染症研究所	実地疫学研究センター
	砂川 富正	国立感染症研究所	実地疫学研究センター
	菅井 基行	国立感染症研究所	薬剤耐性研究センター

研究要旨

医療施設における薬剤耐性（AMR）アウトブレイク対応力強化は、各国で課題となっており、WHO 西太平洋地域事務局も地域内の対応力強化を推進している。WHO と各国保健省が主催する対応力強化のワークショップ・研修に協力することで、アジア太平洋地域各国の医療施設における AMR アウトブレイク対応力強化の課題を抽出した。2024 年 6 月ブルネイ、9 月フィリピン、10 月モンゴルで 2－3 日間のワークショップに参加した。医療機関における AMR アウトブレイク対応力強化に関し、経済的人的資源が限られること、検査室のキャパシティに制限があること、医療従事者の中でも耐性菌についての基本的知識が十分でないこと、リスク評価手法の理解が進んでいないこと、保健行政と病院とのアウトブレイク対応経験が乏しいこと、等複数の国で共通の課題が確認された。今後、同様の活動をしていく際は、ワークショップ・研修内容でそれらの課題をカバーしていくことが望ましいと考えられた。

A. 研究目的

医療機関におけるAMRアウトブレイクの対応は各国で課題となっており、WHO西太平洋地域事務局は、同事務局が作成した薬剤耐性菌アウトブレイク対応ガイダンスを元に、各国での対応力強化を進めている¹⁾。その活動の一環として、①AMRアウトブレイクの探知・リスク評価・対応に係る10のステップを学び、病院環境における AMRアウトブレイク対応能力を強化すること、②現

時点での取り組みに関して、円滑にできている点や課題点を整理し、今後WHOを含めた外部からの支援が必要な対策を議論すること、③ワークショップでの学びを他医療機関に展開する段階的な取り組みについて検討し、通常的能力開発プログラムにどのように組み込むかを議論することの3点を目的とするワークショップを、ブルネイ、フィリピン及びモンゴルで実施した。併せて、当該ワークショップへの参加を

通して、ブルネイ、フィリピン及びモンゴルにおける薬剤耐性菌による集団発生対応（実地疫学調査含む）の状況を把握するとともに、アジア太平洋地域における薬剤耐性菌集団発生対応の準備状況や実地疫学専門家養成コース（FETP）の対応力強化への関わりについての情報収集を行うことも目的とした。

B. 研究方法

1. ブルネイでのワークショップ

2024年6月26-27日の2日間、WHO西太平洋地域事務局、国立感染症研究所薬剤耐性研究センター/実地疫学研究センターの主催で、ブルネイ保健省、医療機関で勤務する医療従事者（例：看護師、薬剤師）などを対象とし、WHO西太平洋地域事務局が作成したシナリオをベースに記述疫学に関する技術的な支援に加え、本邦でのアウトブレイク対応の経験についても提示し、ワークショップを実施した。

2. フィリピンでのワークショップ

2024年9月25-27日の3日間、WHOフィリピン事務所の主催、WHO西太平洋地域事務局、国立感染症研究所薬剤耐性研究センター/実地疫学研究センターの共催で、中核病院（各病院5名ずつ）などを対象とし、WHO西太平洋地域事務局が作成したシナリオをベースにワークショップを実施した。記述疫学に関する技術的な支援に加え、本邦でのアウトブレイク対応の経験についても提示し、WPRO担当者とともにワークショップを支援した。

3. モンゴルでのワークショップ

2024年9月31日 - 10月1日の2日間、WHOモンゴル事務所の主催、WHO西太平洋地域事務局、国立感染症研究所薬剤耐性研究セン

ター/実地疫学研究センターの共催で、中心的な病院の医療従事者と保険証の行政担当者を対象とし、WHO西太平洋地域事務局が作成したシナリオをベースにワークショップを実施した。調査の基本ステップとケーススタディ全体をリードして研修実施を支援した。

C. 研究結果

ワークショップにはそれぞれ40名を超す参加者が参集した。ワークショップにおいて、参加者は基本的な記述疫学は多くのグループで概ね実施できていたが、事例のリスク評価については、初めて接する概念であった参加者も多かった。2つ病院を同グループとして複数のグループワークに取り組みでもらったことで、医療機関の枠を超えた活発な議論が見られた。また、グループ発表を通じて全体での認識共有などを実施し、更に議論が深まった。さらに、今後の具体的なアクションポイントについても議論を行った。一方で、ワークショップ全体を通して、各国のFETPの関与は少ないと感じた。

これらの研修を通じ、医療機関におけるAMRアウトブレイク対応力強化に関し、経済的人的資源が限られること、検査室のキャパシティに制限があること、医療従事者の中でも耐性菌についての基本的知識が十分でないこと、リスク評価手法の理解が進んでいないこと、保健行政と病院とのアウトブレイク対応経験が乏しいこと、等複数の国で共通の課題が確認された。

D. 考察

今後リスク評価に関して、実践の前にその概念の理解を深める取り組みが必要であると考えられた。活発な議論を行う事で、現

地での病院間のネットワーク強化としても重要な機会になったと考えられた。また、本邦以外での薬剤耐性菌集団発生対応の準備状況やFETPの対応力強化への関わりについての情報収集を行う貴重な機会になった。

いくつかの共通する課題が確認されたため、ワークショップや研修を実施する場合、それらをカバーした研修内容としていくことが望ましいと考えられた。

アジア太平洋のAMRアウトブレイク対策の改善に関しては、今後も、WHO西太平洋地域事務局と連携しつつ、AMR に関するアジア太平洋ワンヘルスイニシアチブ (Asia-Pacific One Health Initiative on AMR: ASPIRE) の理念に照らし合わせて効果が見込まれる活動を更に推進していく事が重要と考えられた。

参考文献

- 1) World Health Organization Regional Office for the Western Pacific (WPRO). Responding to outbreaks of antimicrobial-resistant pathogens in health-care facilities: guidance for the Western Pacific region. Manila: WPRO; 2022.